

TAKE FREE

乗って、走って、漕いで、ゆられて。
RIDE! RIDE! OKUTAMA

BLUE+ GREEN JOURNAL

Okutama Town Official Magazine
奥多摩町公式タブロイド

06
Sixth ISSUE



RIDE! RIDE! OKUTAMA

乗って、走って、漕いで、ゆられて。

多摩川の清流と、森に囲まれた静かな湖。
そして、起伏に富んだ美しい山々。
水と緑の恵みにあふれた奥多摩町は、
じつは類い稀なる「乗り物」のパラダイスだ。

歩いて進むのももちろん楽しい、山々の斜面や林道。
眺めるだけで心癒される、川の流れや穏やかな湖面。

でも、「乗り物」を駆使すれば、
頬を撫でる風の種類は変わり、
まったく新しい景色が見えてくる。

乗って、走って、漕いで、ゆられて。

さあ、でかけてみよう。
新しい奥多摩を見つける旅へ。

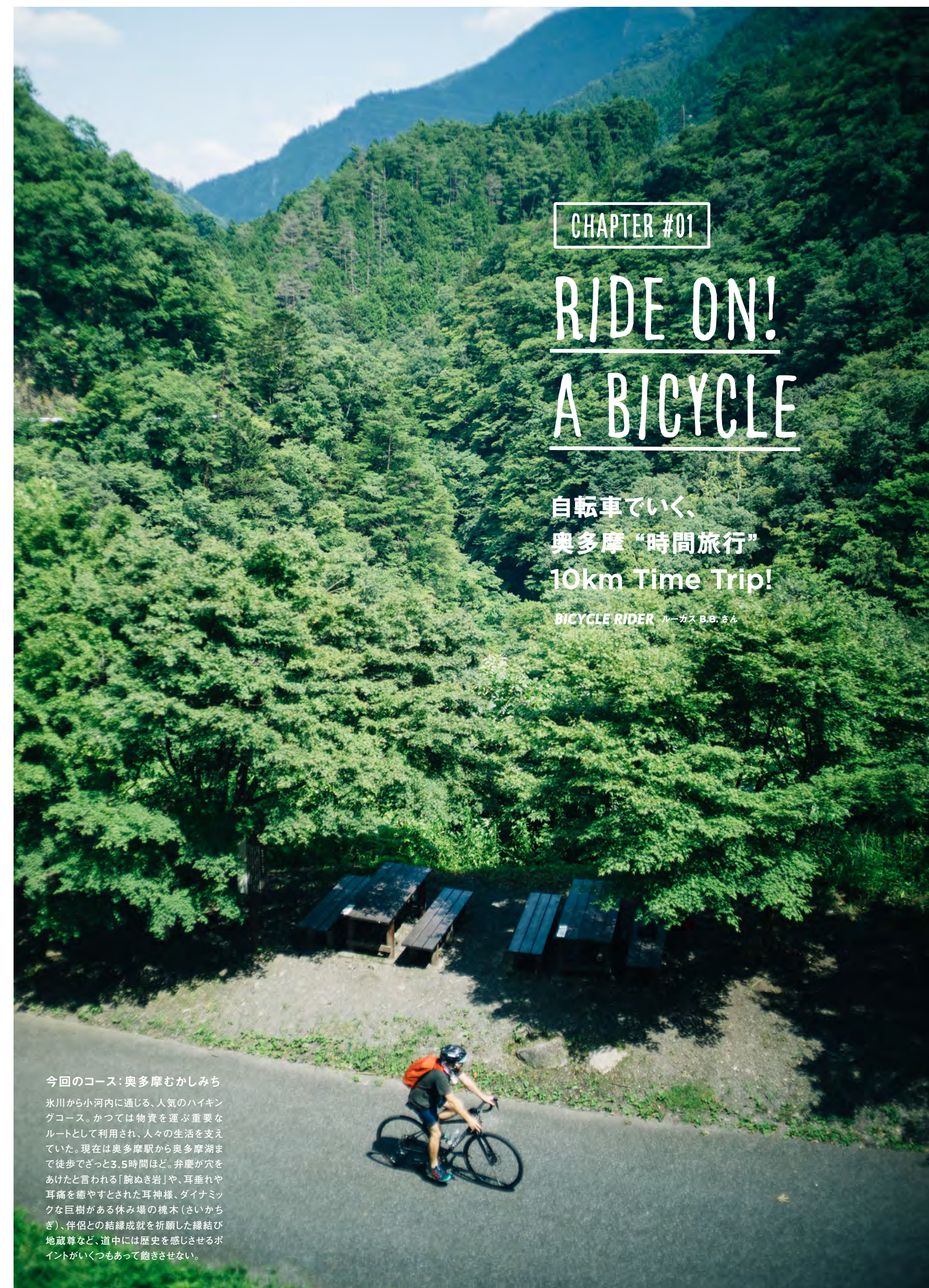


CHAPTER #01

RIDE ON! A BICYCLE

自転車で行く、
奥多摩“時間旅行”
10km Time Trip!

BICYCLE RIDER ルーカス B.B.さん



今回のコース：奥多摩むかしみち
氷川から小河内に通じる、人気のハイキングコース。かつては物資を運ぶ重要なルートとして利用され、人々の生活を支えていた。現在は奥多摩駅から奥多摩湖まで徒歩でさっと3.5時間ほど。弁慶が穴をあけたと言われる「腕ぬき岩」や、耳垂れや耳痛を癒やすとされた耳神様、ダイナミックな巨樹がある休み場の桃木（さいかちぎ）、伴侶との結縁成就を祈願した縁結び地藏尊など、道中には歴史を感じさせるポイントがいくつもあって飽きさせない。

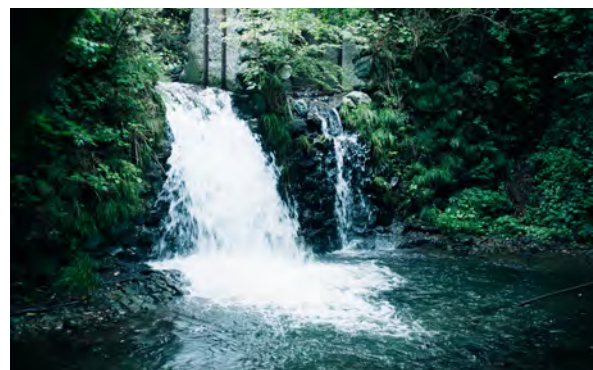


古い民家が続く、むかしみち。自転車にはちょっとした坂道だから、休憩も多く、発見も多い。

緑の日除けが
気持ちいい。



奥多摩湖とカレーと昼寝、最高。



コースの最終局面では、水根沢の滝で泳ぐの楽しみに、坂道でペダルを漕ぐのも苦ではなくなってきた。



ルーカス B.B./アメリカ・ボルティモア生まれ、サンフランシスコ育ち。93年来日し、96年に自身の会社「ニーハイメディア・ジャパン」を始動。以来、「TOKION」「PAPERSKY」「mammoth」「Planted」など斬新な雑誌を次々と編集、発行。日本各地を自転車で巡るイベント「PAPERSKY Tour de Nippon」は年に3回開催し、日本の魅力を多くの人に伝え続けている。
<http://www.papersky.jp>

「山頂までの道程はさほど長くなく、登山口から急峻な登りが続く」というのが、奥多摩の山歩きを総じて説明するにふさわしいフレーズだ。だからかもしれない。この周辺を走って楽しむ町内外のサイクリストは休日でもそんなに多いとは言えない。だけど自転車に乗ってこそ、見える風景はきっとある。そう信じて、僕は奥多摩最高峰のサイクリングロード「奥多摩むかしみち」を、漕いで漕いで漕ぐことにした。

自転車トリップの先導をお願いしたのは、ルーカス B.B.というちょっと面白い人物。日本を拠点に旅雑誌「PAPERSKY」の編集長として活躍するほか、日本各地を自転車でめぐるイベント「ツール・ド・ニッポン」を年に3回開催。雑誌でもイベントでも、自転車を有効に使うその土地の魅力を探し、伝える達人なのである。「僕は歩くのもメッチャ好きだけど、スピード感も行く場所も全然違うから自転車ももちろん好きだね。場所や気分によって“歩き”“自転車”“車”、どれが合うかっていうのはあるし、同じ場所でも乗り物によって見える風景は全然違う」

まずは入り口となる羽黒坂を経てワイルドな林道へ。その昔、人や馬を苦しめたという険しい坂道は自転車では確かに息が切れるが、取り囲む緑が目眩しい。その先、歴史を感じさせる民家の横をゆっくり走っていると、そこに住むおばあさんと目があう。思わず自転車を止め、会話を始めると、軒先になぜあれほど美しく整理された薪が並べられているのかという謎がすぐに解けた。毎週末、息子さんが来て、薪を整理してくれるのだそう。ペダルを漕いでかなり汗ばんだ真夏の午前中。その朗らかな笑顔が、突然、ふわっと吹いた風の涼やかさとともに、記憶の奥に刻まれていく。「何年も前、旅先であつたちょっとした出来事を覚えてることってあるでしょ。僕の場合は、何かに触れたとか、食事の良い香りだとか、肌の感覚が記憶と結びついてるような気がする。自転車に乗っていると風とか温度とか匂いとか雨とかいろいろなものに触れるでしょ。車の中からただ見たっていうだけじゃすぐ忘れるけど、肌で感じた体験っていうのはずっと覚えているよね。自転車の移動はそういうメリットもあるね」

休憩を終え、また自転車を漕ぎだすと、奇岩、樹齢200年のイロハカエデ、溪谷美を一望できる「しだら吊橋」と、次々に目先が変わって飽きさせない。気ままに漕いで止まると、漕いで休憩、の繰り返しで約3時間。目標の小河内ダムまでひと息のところまで来た。通常なら2時間程度で走れるコースを大幅にタイムオーバー。でも何かに急かされる旅でもない。ルーカスはこう口にした。「僕らの自転車イベント“ツール・ド・ニッポン”では早く走らないっていうのもポイントになってる。スピードを競うのも楽しいけど、僕らはその土地の何が面白いかを発見したいからね。大体10kmくらい走ったら、養蜂の様子を見学したり、地元の面白い人が登場してトークしてくれたり、うどんを作って食べるワークショップを体験したり。この前は長崎で偶然、ツアー中に隠れキリシタンの人を見つけたんだ。話しかけたら親切にしてくれてね。スピードを競って走っているとそういう体験とか発見はできないよね」

駅から奥多摩湖まで約10kmの道程。さほど長くない距離だが、雨や滝などの「水」と林道や溪谷の「緑」を交互に感じられる、奥多摩を凝縮したような道のりでもあった。最後に奥多摩湖を眺めながら遅い昼食を。キンキンに冷えた水とカレーが、いつもの何倍もおいしく感じられた。「自転車の旅ってコースを考えるのが面白いよね。どこどこを結ぶかっていう事前の準備は雑誌の編集作業にすごく似てるし。実際に自転車に乗ってでも、どこへ寄り道するかとか、何に目を向けるかっていうのはその人次第で、楽しさも変わってくる。白龍神社で食べたお菓子の味とか、途中で聞こえたカミナリとその時揺れた空気とか。そういうものも全部含めて、自転車でしか体験できない奥多摩を今日は楽しんだね」



江戸時代、甲斐国との交易路として利用された「奥多摩むかしみち」。古びた看板も雰囲気がある。

自転車からしか見えない風景を探しに。



これでも
やっぱり
東京なんだ。

RIDING IN THE GREEN WIND

緑のなかを走り抜けて。

奥多摩の集落を空から見ると、緑の中に人が住まわせてもらっている感じ。自転車ならこんな風景のなかを効率よく巡ることができる。



AT THE CHECK POINT!

むかしみちで
出会った
ヒトとモノとコト

廃墟と化した昔の線路跡は、まるで植物園のように緑が茂る。思わず自転車を降り、ちょっと不思議な線路の上を歩いてみた。



高さ30mの巨大な岩が祀られる白髭神社。石灰岩の断層でもあるこの大岩も圧巻。当然、ご利益を期待して岩にタッチ。



境の清泉や水根沢など、むかしみちでは清らかな水場も楽しみの一つ。境の水場で思い切ってキャップに水を入れ、ジャンプ。

じっくりと煮込んだ鹿肉入りのカレーを「カフェ インディゴブルー」で。これからしばらくは、鹿の風味と奥多摩の風景が脳内でリンクするだろう。



むかしみちの最終目的地、奥多摩湖。体力に自信のある人なら、そのまま湖畔沿いを自転車で周遊するのもいいだろう。この日は奥多摩湖を見渡す絶景カフェでブレイク。



奥多摩駅前の商店で何気なく買っておいとお菓子が、期待以上の美味しさで休憩時の楽しさが2倍に。ゆずの香りが奥多摩の風景とともに記憶に刻まれた。



医療が不自由だった時代は、耳垂れや耳痛のときに穴のあいた小石を供えて祈ったという「耳神様」にて。道中、こうした様々な「むかし」に出会えるのも、むかしみちの魅力の1つ。



3時間超、走りきった後は水根沢でほったたけ体を清める。場合によっては足水、場合によっては滝に飛び込むのもアリ。



美しい薪が並べられた家で、住人のおばあさんと話し込む。その土地に住む人との何気ない会話は、旅を楽しむための欠かせない時間。



今回の自転車トリップをサポートしてくれたのが、奥多摩駅前のレンタサイクルショップ「トレックリング」。クロスバイクやマウンテンバイク、電動自転車など、多様な種類の自転車をレンタルしてくれる。奥多摩だけでなく、青梅や河辺で自転車返却可能な点も便利だ。写真はトレックリングのリーダー、沼倉正毅さん。
<http://trekking.jp/>



むかしみちのアスファルト50%、未舗装道路50%といったバランスはちょうど良かった。アスファルトの時はゆっくりクルージングしながら存分に風景を楽しむことができた。

その昔、木材を運んだと言われる急流には、この吊橋「しだくら橋」がかかっている。時折、ユラとした揺れを感じながら、ダイナミックな壱岳渓谷を眺める。

Another Side of Okutama



グラベルライトで知る、未知の奥多摩

大切なのは「どこまで行けるか?」という好奇心。

奥多摩の王道とも言うべきサイクリングコースを走った後は、道なき道を行くグラベルライドの世界を体感してみた。グラベルとは英語で「砂利」の意味。見た目は通常のロードバイクと同様だが、舗装路はもちろん、未舗装路で威力を発揮できるよう、フレームが太く、オフロードに適した太いタイヤを履くことが可能となっている。そんなグラベルバイクを日常的に楽しむのが町内在住の高橋洋一さん、まきさん夫妻。人にも車にも出会わなそうな林道を求めて、地図を見ながらコースを探索。夫婦で気ままに、奥多摩グラベルを楽しんでいるという。この日は鋸山の入り口から林道へ入り、檜原の方角へ自転車を走らせてみる。なかなかの斜度をゆっくり切り切ると頂上は標高990mにもなっていた。道中、車にも自転車にも登山客にも遭うことはなし。特にゴールや時間を設定せず、きままに裏山を走る感覚は、「むかしみち」などの人気コースを走るとはまた違った味わいがある。洋一さんは言う。「奥多摩でグラベルを楽しめるコースは結構あるんです。たとえば、「むかしみち」からちょっと脇道にそれるだけで、いつもとは全然違った風景や雰囲気を楽しむことができる。古里(こり)にもグラベルを楽しむのにいいロケーションがあるし、まだまだ自転車乗りは少ないし、奥多摩は環境として相当、恵まれていると思います」。本来、自分でコースを創造していくのがグラベルの楽しみ。古い山道や脇道が無数にある奥多摩の山々は、まさに絶景コースの埋もれた宝の山とも言える。グラベルライドは特別な技術も必要とせず、そもそも悪路に強い自転車なのでちょっとした冒険にも最適。求められるのは、ちょっとした想像力と、「どこまで行けるか?」という好奇心だけだ。



CHAPTER #02

RIDE ON!
A SUP YOGA

幻想的な湖でSUPヨガ。
水、霧、緑と一体に。

エメラルドグリーンの水をたたえた、森のなかの小さな湖、白丸湖。鏡面のようにつりとした湖面には、周囲の森がシンメトリーに映り込み、春夏秋冬の絶景を描き出す。「豊かな広葉樹に囲まれた白丸湖は、奥多摩でも特別な場所。私にとってパワースポットなんです。いつも違う景色を見せてくれるから毎日行っても飽きることがなく、季節の移ろいを日々感じることが出来ます。野鳥や生き物の種類も豊富で、カワセミがいることもあるし、カモシカは結構よく見られますよ」

そう話すのは、奥多摩を拠点に様々なアウトドアプログラムを実施する「ぼちぼちアドベンチャーすその」のガイド、本間みさとさん。ヨガインストラクターの資格を持ち、2017年から白丸湖でSUPヨガのプログラムを開催。安定感のあるSUPに乗って、白丸湖をゆったりと漂いながら行う、メロウなヨガ体験が好評を集めている。「SUPは水の上で座ったり寝転がったり立ったりできる、とっても自由な乗り物。水と森に包まれて

いるとリラックスできる一方で、ボードのうえでバランスを取ろうと緊張もします。ヨガは、美しい自然のなかで身体を動かして癒されるためのツール。スタジオでのヨガもいいけれど、自然のなかでのヨガは感覚がより鋭敏になって何倍も気持ちがいいんです。身体を動かしながら、心も静かに動かされる。自然との一体感を味わえますよ」

風のある日なら風に乗って流されながら、小雨が降ってきたら優しい雨に打たれながら。ドボンと水に飛び込んでみたり、興味の赴くまま、さながら自然観察会のようになったり。その日の天候やゲストの反応によって、プログラムの内容を柔軟に変更するのがみさとさんのスタイルだ。「とにかくリラックスして楽しんで、この自然を全身で味わってもらいたい。木の間から光芒が差す新緑の季節、霞（もや）が美しい夏の朝はもちろん、湖面に落ち葉が浮かぶ紅葉の秋、冬はキーンと寒いけれど、それはそれで気持ちがいい。SUPもヨガも初めて、という人にもぜひ味わってもらいたいですね」



左上:春から秋にかけては、早朝や夕方に霧がかかることの多い白丸湖 右上:「気持ちよくなってもらうのが目的」のため、ヨガは無理のないリラックス系のポーズが中心 左下:明るい性格で笑顔がステキな美郷さん。一緒にいるだけで不思議と元気になる、魅力的なキャラクター 右下:カルガモの親子を発見。小さなネズミが泳いでいることも

ぼちぼちアドベンチャー すその
[SUPヨガについての問い合わせ]
TEL : 070 1263 5010
MAIL : misatohomma@gmail.com
URL : http://www.susoonookutama.com
※SUPヨガ専用ホームページは現在制作中



「リバーボード」は、フランス生まれの新しいスポーツだ。両足にフィンを着け、専用のボードに乗り込む。目線は水面ギリギリ。全身でボードをコントロールしながら急流を下ると、まるで川と1つになったような特別な感覚を味わえる。「ラフティングのガイドを長年やってきましたが、数年前、初めてリバーボードに出会い、川で遊ぶのに最適な道具だと確信したんです。数あるリバースポーツの中でも、とくに原始的で刺激的。パタ足で直感的に動け、自然のリズムと調和しながら全身で川を感じられる、最高に爽快でスリリングなスポーツなんです」

こう話すのは、JR御岳駅からほど近く、全国的にも希少なリバーボードツアーの専門店「リバーボードクラブ」の菅原洋平さん。リバーボードの存在を知り、4年前、突如、ガメラの世界大会へ参加。そのポテンシャルに魅せられ、インドネシアにあるリバーボードのコミュニティで、ボードづくりを基礎から学んで技術を習得。2017年にお店をオープンし、ハンドメイドのオリジナルボードを用いて、青梅、奥多摩をフィールドにリバーボードツアーを開催している。初心者向けの体験ツアーでは、流れの使い方や読み方、止まり方などを学びながら、多摩川

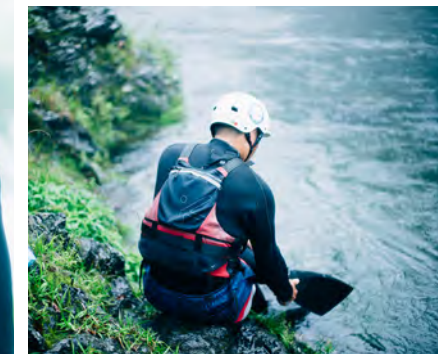
を3〜4kmほど流れていく。穏やかな湖面の白丸湖は、練習フィールドとして活用。湖を一周しながら、キックの練習をすることもあるという。

流体力学やフィールド経験を反映・研究しながら改良に改良を重ね、これまで作成したボードは約30個。恐らく日本唯一のリバーボード専門シェーパーでもある菅原さんは、「日本でリバーボード文化を根付かせることが目標」と話す。「川を、身体で泳いで下るのは、とても特別な感覚。初めての人でも楽しめますし、競技としてもポテンシャルがあります。多摩川は、国内でもベストなフィールドだと思っている、川のサイズが程よいのに、流れも緩すぎない。岩も多く、急流もあるなど変化があっても面白いです。ここ、多摩川で、誰も見たことのないリバーボードの可能性を追求、表現していきたいと思っています」

まだ誕生して間もなく、発展途上にあるスポーツ。それだけに、世界との距離も近い。昨年参加した世界大会では、菅原さんはスラローム部門で6位に入賞。「スポーツとして成熟させて、競技者も育てていきたい」と意気込みもアツイ。多摩川から世界へ。リバーボードという新ジャンルで、多摩川が注目を集める日もそう遠くないかもしれない。



リバーボードクラブ
TEL : 080 6064 6638
MAIL : riverboardclub@gmail.com
URL : https://riverboardclub.com



CHAPTER #03

RIDE ON!
A RIVER BOARD

川下りの新しい選択。
リバーボードで流れを制する。



テントを担いで徒歩で奥多摩方面へ。美しい奥多摩湖と付近の山々を観て、水の循環を守るためには、森林をメンテナンスする必要性を強く実感したという。



急流ゾーンはラフティングで乗り越えた。御岳から青梅まで約13kmを駆け下りた。急流を乗り越えるべく、奥多摩に拠点を持つ「ぼちぼちアドベンチャー すの」にサポートを頼んだ。



マウンテンバイク歴10年以上を誇る佐藤さん。今回は40km近くを余裕で走行し終えた。



SUPで東京湾へ漕ぎだし、ゴール。羽田空港沖のため、頭上を飛行機が飛び交う貴重な体験。最後は、兄が操縦するヨットにピックアップしてもらった。



最初の一滴を求めて笠取山の山頂直下にある源流「水干」へ。写真は、関東水源の始まりの地である「分水嶺」。東側は荒川、西側は富士川、そして、南側が多摩川へと分かれていく。



道中、奥多摩町海沢で、草鞋を編んで沢登り体験も。水と戯れと、格別に気持ちがいい。



久しぶりのカヤックは少々不安も。青梅と奥多摩に拠点を持つカヤックスクール「GRAVITY」がサポート。



SUPでクルージング。多摩川の色、匂い、雰囲気は、市街地へ入るにつれ変わるのが分かるという。SUPでの道程はすべて、青梅に拠点を持つ「リバーベース ハラウ」がサポートした。

笠取山の源流から東京湾へ。多摩川の“一滴”になる冒険記

全長138km。山梨県笠取山から端を発して、奥多摩湖へ注ぎ、東京、神奈川を通り抜け、羽田空港沖の東京湾へと流れ着く大河、多摩川。この壮大な水の物語を、乗り物を駆使して辿るといふ冒険にチャレンジした一般女性がいる。「奥多摩フリーク」と自称共に認める、東京泊江市在住の佐藤高子さん。子どもたちが成人し、自分の時間ができた佐藤さんは、ある時、友人に誘われて奥多摩町へ遊びに。そして多摩川的美しさ、山の雄大さ、人の温かさに心を打たれ、奥多摩へ毎週のように足繁く通うようになった。佐藤さんの奥多摩での過ごし方はじつにアクティブだ。豊かな自然をフィールドに、登山、カヤック、SUP、ピラティス、マウンテンバイク、キャンピングなど様々なアクティビティに挑戦。その1つの集大成ともいえるのが、「多摩川の一滴になる」という自ら考えたチャレンジだった。

「自宅が多摩川沿いにあり、今まで多摩川を通じてたくさんの人とのご縁や、自然の恩恵をいただけてきました。最初の一滴から河口まで、お世話になっている人との縁を繋ぎながら、“多摩川”を通して大好きな自然を楽しむ旅がしたいと思ったんです」

スタートは、2019年4月16日。笠取山への雪道登山から始まり、多摩川上流の之一瀬川、丹波川沿いをテント泊で歩いた。奥多摩湖畔を抜け、奥多摩むかしみちを経て氷川キャンプ場へ。大塚山、御岳山への寄り道を経て、奥多摩町海沢で深谷歩き。ラフティングで豪快に約13kmほど下ると、カヤックに乗り換え、青梅市民球場へ。その後は、SUPで川下りがメイン。道中、川水が少ないところは、マウンテンバイクやランニング、ノルディックウォーキングで繋ぎ、最後は、またはやSUPで飛行機を見上げながら東京湾へ到着した。仕事をしながらの断続的なチャレンジだったため、旅程は全15日。ゴールしたのは、7月3日のことだ。

「移動するのはエネルギーを使うけれど、川の流れを利用すれば、楽しみながら移動ができる。だから、移動手段が多ければ多いほど楽しい、そのときの気候や自然環境に合った、ベストな乗り物をチョイスしながら移動することこそ、醍醐味だと分かりました。このような多摩川下りのチャレンジは、今までプロの人の特権のようなものでしたが、私のような普通の人でも達成できたのは、これまでもお世話になってきた川のプロたちが、それぞれの得意分野でサポートを繋いでくれたおかげ。今度は、誰かがチャレンジするときのお手伝いもしてみたいですね」

好きが高じて、現在、奥多摩への移住も検討中だという佐藤さん。自然への深い愛情に裏打ちされた、彼女のチャレンジはこれからも形を変えて続いていく。

Follow the Water Journey

by kayak, boat, SUP, bicycle etc

奥多摩の公共交通はどんな未来を描く？

今、見直されるべき 助け合い交通の必要性

ここ数年は5000人程度で推移している奥多摩町の人口。今後は当然ながら人口減少が予想され、「ライド」の問題は深刻化するはずだ。ここで言うライドとは町民が何に「乗って」移動するかということ。高齢者や障害者にとって、その町の公共交通がどう生活を支えてくれるかは切実な問題となる。日本各地で交通空白地における可能性を探る、都市学者の秋山哲男（中央大学研究開発機構）さんはこう話す。「欧米において、過疎化する地方の問題に関してはご存知“ウーバー”サービスが力を発揮していますね。一般の方が好きな時間にドライバーとして仕事をでき、顧客としてはスマホから近くの車を探し、目的地への移動に利用できるという便利なシステムです。バスやタクシーが極端に少ない過疎地や高齢者などにとってはウーバーは特に有効なシステムですが、日本では道路運送法によって一般の方が運賃をもらい、ウーバーのドライバーとして活動することはできません。今後もこの制限は続くと思われ、過疎地の交通はさらに難しい状況になっていくでしょう。自動運転による公共交通の整備などはまだちょっと先の未来の話。アメリカやドイツ、イギリスなどでは障害者の移送に関し、国の予算で対応するが日本ではそのような事例

はなし。人口減少が過度に進めば、バスやタクシーなどの公共交通の運営が極めて困難になることが予想できる。とりわけ、急峻な道路が多い奥多摩では徒歩で動けるエリアも限定される。今後、訪れるかもしれない公共交通の危機にに対し、我々ができることはあるのか、秋山先生に聞いてみた。「そもそも公的機関がなんとかしてくれる、という一般に広まった考えをあらためなければなりません。つまり、ひとりひとりが不便を感じたなら、まず冷静に声をあげていくこと。各人が意見を持ち、理想のかたちを描き、いろいろな場所ですその思いを主張していく。このような行いによって状況が改善していくことはおおいに考えられるでしょう。また、“助け合い”の精神をいまいちど、見つめなおすことです。自分の住む地域で誰か移動に困っている人がいれば、可能なシナリオにサポートしていきましょうということ。そのような温かさ、サポート体制が日本の地域を救うかもしれません」。心配が増大していく一方で、新たな公共交通を生み出そうという機運も地域によっては高まっている。相乗りや定額運賃性など、過疎地のタクシー利用法も模索は始まった。技術や制度の進化に期待しつつ、個人レベルでも必要なら、声を挙げていきたいところだ。

Opinion1

求む! バスを利用したくなる 新たなアイデア

奥多摩駅前には基本的にタクシーが一台、朝から夕方までスタンバイ。でも、その一台がお客さんを乗せてどこかへ行ってしまえば、別のタクシーを奥多摩周辺でつかまえるのは難しくなってしまう。そこで電車以外の頼みの綱が公共のバスとなる。エリアによって本数が少ないとはいえ、バスの運行がなくなってしまう移動に困る人々は続出する。そこで未来のバス「ライド」はどのようなになっていくのかについて、西東京バス株式会社の桃井亮太さんに話を聞いた。「奥多摩に限らず大問題となっているのは運転手不足。業界全体で自動運転の研究は進んでいますが、今後、奥多摩に限らず運転手不足によってバスの運行が難しくなる地方は増えてくるでしょう。そして、できれば奥多摩のバスは奥多摩在住の方に運転していただきたいので、地元からの応募は特にうれしいですね」。それに加え、当然、利用客の減少も便数の減少に直結してしまうとか。それゆえ、特に地域住民は、バス利用を積極的に行うことで便数減少に歯止めをかけなくてはならない。

「地域によっては、週末はマイカー、その代わり特定の曜日はバスに乗りましょうという働きかけを行っているケースもあります。また、地域の足を守るのには住民の方々次第、というメッセージを積極

The Future Public Transportation In Okutama

Opinion2



CHAPTER #04

RIDE ON!
AN ELECTRIC
BIKE駅前から自力で湖へ!
電動バイクでゆるりと
1DAY TRIP

奥多摩に新しい「ライド」が登場!

たとえば奥多摩駅を出発点として観光をするなら、登山口までバス、あるいは自転車をレンタルしてツーリング、なんていうパターンが考えられる。そんな観光の選択肢を拡げてくれそうなショップが今年の夏、オープンした。この「E2ring」でレンタルできるのはスマートでデザイン性に富んだ「BLAZEスマートEV」という電動バイク。日原鍾乳洞往復や、絶景の小河内ダムツアー、鳩ノ巣溪谷と白丸湖をハシゴなんてことが気軽にできてしまうのだ。ショップオーナーの加藤進さんはこう話す。「満充電で約30km走ります。たとえば奥

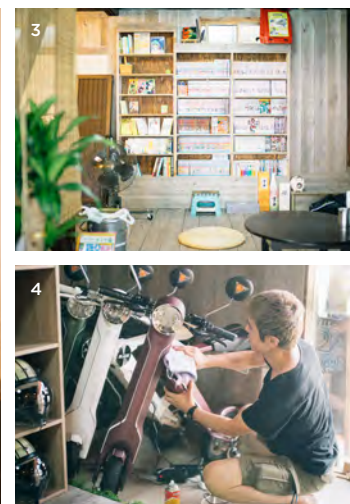
多摩駅から奥多摩湖までは片道6kmくらい。だからちょっと寄り道しても十分、帰って来られるんですよ。現在、奥多摩の様々なお店で充電できるよう、どんどん働きかけをさせていただいて。今のところうちのショップ外で14箇所、充電できるスポットを用意しているんです。予備のバッテリーを持ってでかけていただくこともできるので、あまり電池を気にせず思い切り奥多摩を楽しんでほしいですね」。奥多摩に新しい「ライド」を持ち込んだという意味で、加藤さんの活動は大きい意味を持つ。乗ってみると分かるが、驚くほど振動や騒

音がなく、静かにスムーズにライド可能。バイクというより自転車の乗り心地に近い。どこへ行くにも移動そのものを楽しめるのが、新感覚と言えるだろう。花屋さんを改造したショップでは、進さんのパートナーであるユキさんがマッサージ師としても営業中。これまで奥多摩にはなかった楽しさと癒やしを、この仲良し夫婦が提供してくれている。進さんは言う。「借りてくれたお客さんはEバイクに乗ること自体を楽しんでいることが多い。人に楽しさを提供できている実感があって、自分も幸せを感じています」。

奥多摩電動バイクレンタルE2ring

奥多摩町氷川1417
TEL : 070 6967 0860
10:00 ~ 19:30
水曜定休

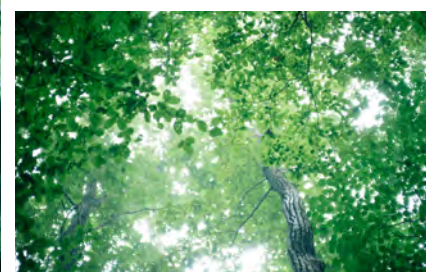
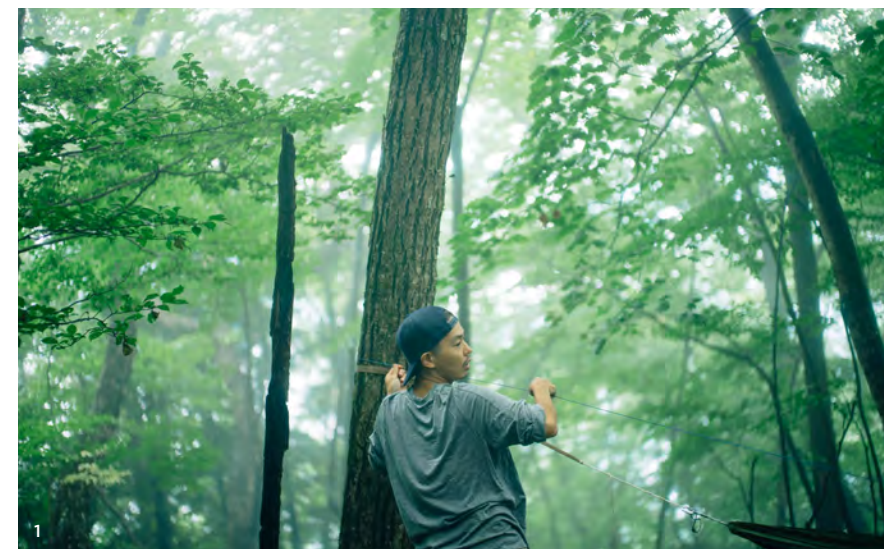
バイクレンタル料金 (ヘルメット・充電器・ワイヤー錠含む)
・1日利用 5,000円
・3時間 3,000円
・14:00 ~ 3,000円 (当日のみ受付可)
・16:00 ~ 1,500円 (当日のみ受付可)
※返却時間超過時は1000円加算、以後1時間毎に1000円加算
URL: <https://e2ring.jp>



1. デザインもカラーリングも可愛い「E2ring」のバイク。奥多摩で乗っていると道行く人が思わず足を止める。 2. マッサージ師として長い経験を持つユキさん。進さんと同じショップ内でマッサージ店「たまには」を営業する。 3. ちょっとくたびれた花屋さんをショップへと自力で改造した進さん。大好きなマンガに囲まれながらお客さんを待つ。 4. 最高速度は約30km/hだから、スピード出しすぎなんてことにもならない。どこまでも可愛い電動バイク。



CHAPTER #05

RIDE ON!
A HAMMOCK山中でハンモックに
揺られる、最高の時間この揺れ、
絶対クセになる。

奥多摩でも随一の眺望で知られる月夜見第二駐車場。ここから御前山に抜ける林道で至福の時間を過ごすため、二宮勇太郎さんは軽やかに歩を進める。ほどなく2つの大木に目をつけ、バックバックからおもむろに取り出したのはハンモックだった。「斜面にテントを張ると落ち着かないですよ。ハンモックは、ちょうどいい大木さえあればつれるし、斜面は関係ない。それに地面が湿っていても快適。なによりこれに乗れば、最高の眠気を得られる。ぶらっと山へ行って、最適な場所を見つけ、ハンモックの感触を楽しむ。僕にとって最高の時間の使い方ですね」。三鷹のアウトドアショップ「ハイカーズデポ」で働きながら、ハンモックの楽しさを広く伝え続ける二宮さん。家には20種類以上のハンモックがあり、場所や時間によって使い分けながらその楽しさを追求しているという。「2012年、アメリカのPCTという4300kmのトレイルを5ヶ月かけて歩いたんです。それほど長距離だから寝泊まりする場所も人それぞれに決めるし、服装も人々の属性も様々。本格的なハイカーから80歳過ぎのおばあさん、小学生の女の子とお母さんなど、本当にいろいろなハイカーが歩いていました。それを見て、同じ道なのに正解はひとつじゃないなって思った。山歩きにもいろいろなスタイルがあって、ハンモックを使って旅をするハイカーもいたんですよ。そんな状況に僕も影響されてか、まだ日本にほとんど知られていないハンモックの楽しさを密かに伝えていければと思うようになったんです」。樹林帯で一人だけの時間を楽しむため、時々奥多摩へ訪れるという二宮さん。ただ、ハンモックに揺られることだけを目的に山へ、というのなんだから新しく面白。



1. 樹木自体の安定感、木と木の適度な間隔さえあれば、ハンモックは簡単に吊れると話す二宮さん。言葉通り、ものの3分ほどでセットは完了した。 2. ハンモックに寝ながらジェットボイルを使えば空中でコーヒーを淹らすこともできる。湿った地面や斜面は全く気になくいい。 3&4. 大きくわけて「小さく軽いもの」「大きく、ゆったりと安定したもの」の2種類だとか。寝袋とセットで使えば、森のなかで極上のベッドが完成する。



“ノリノリ”なニュース

RIDE, RIDE, NEWS!

JR青梅線(青梅～奥多摩駅間)
「東京アドベンチャー
ライン」が一周年に

2018年9月より、「東京アドベンチャーライン」という新たな愛称が付けられたJR青梅線の青梅～奥多摩駅間。東京にありながら、豊かな自然のなかでアウトドア・アクティビティを気軽に楽しむことができる……そんな奥多摩の魅力を素直に表した愛称も一周年を迎え、すっかり定着しつつある。今年の7月には、「東京アドベンチャーラインで遊ぼう!」をコンセプトとした2代目のラッピング列車が登場。立川～奥多摩駅間を1編成が好評運行中だ。※運行区間は変更する場合があります。

JR東日本八王子支社
https://www.jreast.co.jp/hachioji/

奥多摩・多摩川でのカヌー体験や初心者教室、ツアーなどを行う「NPO法人奥多摩カヌーセンター」では、毎年、小中学生向けカヌー教室を開催。白丸湖をフィールドに、経験豊富なインストラクターが、カヌーの乗り降りからパドルの操作、転覆した時の対処法など、基礎から丁寧に指導してくれる。奥多摩町在住の方は参加費無料、町外の方は、小中高校生は参加費無料、保護者が参加する場合は3000円。4～11月の月一回土曜日に開催。

NPO法人奥多摩カヌーセンター
child@okutamacanoe.jp
http://www.okutamacanoe.jp

小中学生を対象にした
カヌー教室
参加者を募集中奥多摩エリアへのお散歩もOK
小菅村「うまカフェ」がオープン

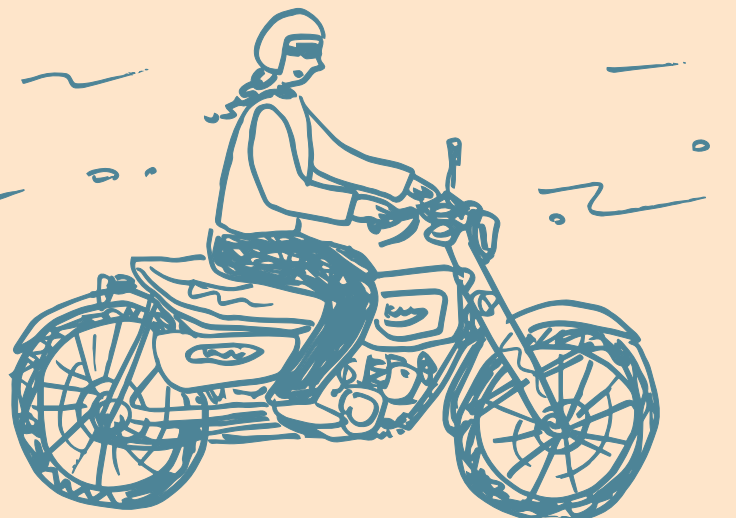
奥多摩町と接する界地の地、山梨県小菅村。奥多摩湖からほど近の場所に、2019年1月、「うまカフェ」がオープン。乗馬体験のゲストの休憩所として運営するほか、イベントも多く気軽に立ち寄ることができる。ポニーの「夢ちゃん」に乗って、林道散策が楽しめる乗馬体験は、希望があれば、県境を越えて奥多摩エリアまで足を伸ばしてもOK。乗馬体験、ランチ共に要予約。

RivendaleHorseClub うまカフェ(山梨県北都留郡小菅村2520-1)
https://rivendalehorseclub.com

「奥多摩むかし道」の人気スポット
「茶屋 榊」で
バイカー割引実施中

JR奥多摩駅と奥多摩湖を結び、散策にもツーリングにも最適な「奥多摩むかしみち」沿いにある「茶屋榊」。カンガルー肉を使ったハンバーガーをはじめ、飲食メニューを提供するほか、地元作家の染め物やアクセサリなどの雑貨やお菓子も販売。気軽に立ち寄れるお休み処としてバイカー達にも人気で、店主夫妻も大のバイク好き。2019年11月までバイカー限定キャンペーンを実施中。バイクで来店すると、コーヒーを100円で提供してくれる。

茶屋榊(奥多摩町境818) TEL:0428 74 9083



「乗る」にまつわる様々なニュースをピックアップ。

奥多摩町に
暮らす

自然がいちばん濃いTOKYO

都心から約1時間半、東京最西端に位置する奥多摩町。近年、自然豊かなこの町に、移り住む人が増加中だ。自分らしい生き方を謳歌する移住者へのミニ・インタビュー。

【line on】藤居太輔さんファミリー



埼玉県飯能市出身の藤居太輔さん、実由季さんご夫妻が奥多摩町に移住したのは、2018年のこと。青梅市にあるコンビニエンスストアを経営するご夫妻は、同市街地に暮らしていたが、長男・奏汰くんの誕生をきっかけに「子育てでは自然豊かな場所です」と考えるように。そんな折、奥多摩町の子育て支援を知り、移住を決意した。町営住宅で暮らし始めた一家は、定住を望み、2018年に町が初めて公募した「子育て応援住宅」に応募。「子育て応援住宅」とは、都内で初めてとなる譲与型公営賃貸住宅で、町が用意した新築住宅に22年間継続して住めば、その家が無償譲渡されるというもの。使用料は月5万円だが、子どもの数に応じて減額もされる。審査の結果、藤居さん一家が選ばれ、2019年3月に入居した。「庭から山が見えて、自然のなかに暮らしている実感があります。週末は、BBQが定番。友人もよく遊びに来てくれますね」と、太輔さん。子育てするにも最高の環境で、「以前は、公園に行かないと子どもを遊ばせられなかったですが、ここなら車通りで少なく、安心。近所で川遊びもできます。待機児童ゼロ、保育園料が無料など、子育て支援が充実しているのもありがたい」と、実由季さんも朗らかに話す。広々とした庭にはドッグランを併設し、愛犬たちがのびのびと過ごし、その横で奏汰くんが元気いっぱい駆け回る。思い描いていた理想の暮らしは、始まったばかりだ。

子育て応援住宅とは?

永住を考えている子育て世帯(※入居申込時における世帯主の年齢が43歳以下の方で子ども【中学生以下の方】がいる世帯)を対象に、22年間の定住で無償譲与する住宅のこと。奥多摩町では少子化・定住化対策事業の一環として、2018年に初めて募集を行った。



— Welcome to —

OKUTAMA
TOWN

東京の森へ移住定住のススメ

都下での生活と自然豊かな環境を両立する奥多摩町では、移住・定住者を迎えるために、さまざまな支援を行なっている。住宅支援や子育て支援制度も充実しており、ファミリー世帯にも暮らしやすい町だ。

若者定住応援補助金

奥多摩町で住宅を新築、増築、改築、購入された方に、補助金を交付。事業費が10万円以上。事業費の2分の1以内、最大で200万円の補助。事業を実施後、1年以内のもの。補助金の限度額に達しない場合は、最初の補助金の支払いを受けた日から起算して1年以内に再度補助金等を申請することができる。対象者:年齢45歳以下の夫婦又は50歳以下の者で子ども(高校生以下の者)がいる世帯、若しくは35歳以下の単身者。

住宅資金借入の利子補給

奥多摩町に定住を目的とした住宅を新築、増築、改築、購入された方に、資金借入に対する利子補給を実施。融資金額500万円以上で償還期間が10年以上。借入利率の2分の1。年額30万円以内(給付期間36か月)。対象者:年齢45歳以下の夫婦又は50歳以下の者で子ども(高校生以下の者)がいる世帯、若しくは35歳以下の単身者。

お問い合わせ: 奥多摩町定住応援総合窓口 Tel.0428 83 2310 http://www.town.okutama.tokyo.jp

子育て支援

【乳幼児】保育園入園時に係る費用の一部を助成、町内保育園に通園するおさんの保育料を全額助成。医療費(保険適用分)を全額助成。

【小・中学生】入学時に係る費用の一部を助成。給食費、通学費、医療費(保険適用分)、中学生制服等購入費を全額助成。多子家庭またはひとり親家庭の学童保育の育成料の全額または一部助成。

【高校生】進学時に係る費用の一部を助成。通学費(定期代)、医療費(保険適用分)を全額助成。通学の送迎にタクシー料金の一部またはガソリン券を助成。

その他

いなか暮らし支援住宅、空家バンク制度、安く家が借りられる町営若者住宅、多子家庭の助成制度など、ほかにも定住および子育てにまつわるさまざまな支援を行なっている。

Edit & Text & Photo: Yukiko Soda [miguel.] Piroshi Utsunomiya [miguel.] Art direction: Atsushi Kodani Illustration: Toshiyuki Hirano

発行:東京都奥多摩町 http://www.town.okutama.tokyo.jp 編集&制作:株式会社ミゲル 〒198-0101 東京都西多摩郡奥多摩町大丹波640 miguel@dg8.so-net.ne.jp http://www.miguel-web.info 2019年9月発行 本誌は奥多摩町内の各観光施設、JR青梅線各駅構内、都内協力店などで配布しています。店頭などで無料配布にご協力いただける施設を募集中です。ぜひお問い合わせください。Cover story: 奥多摩を代表する乗り物といえば「カヤック」。白丸湖でのクルージングも、多摩川でのスラロームも、いずれもここでしか味わえない気持ちよさがある。

